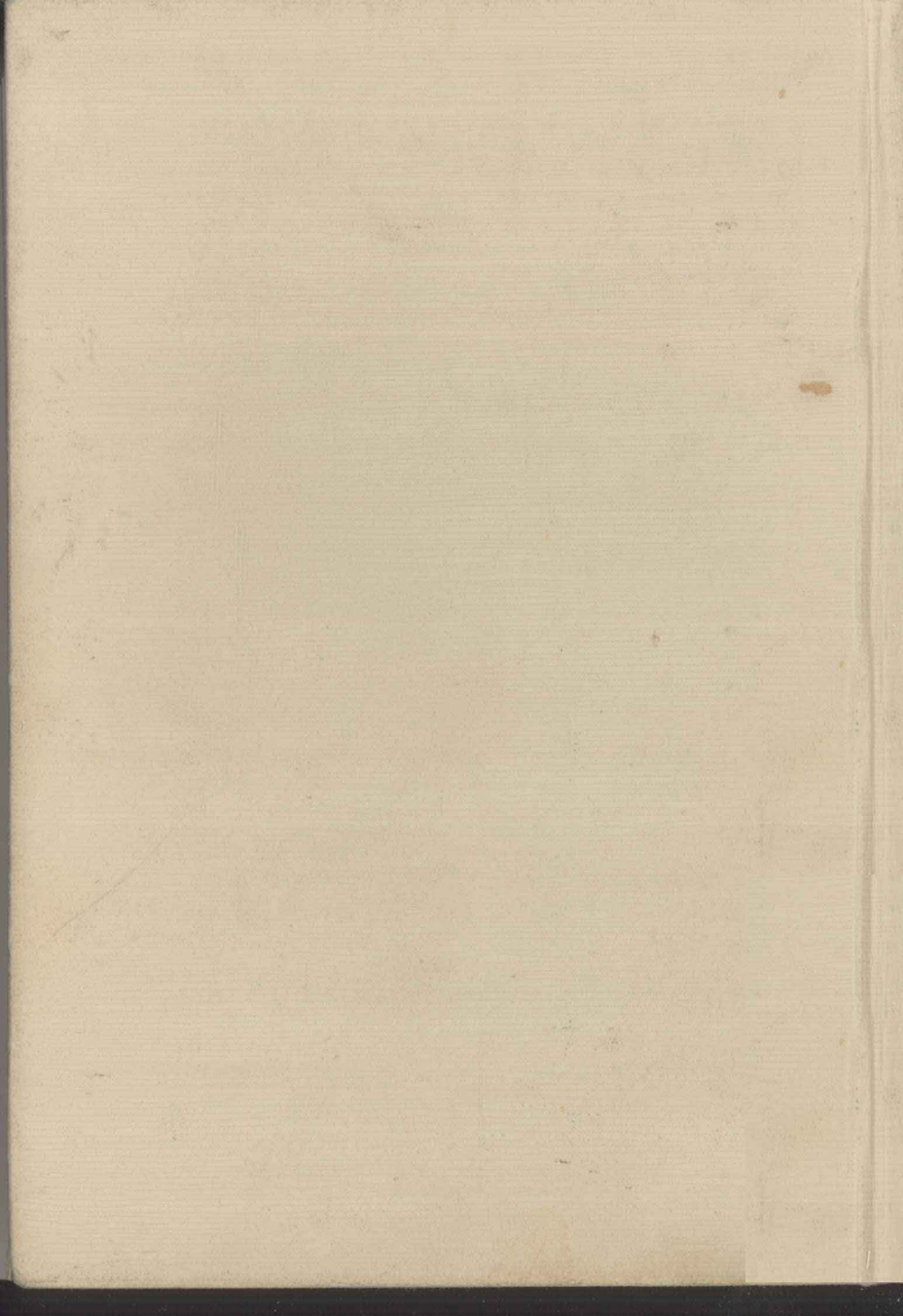




無名戦士の  
記録シリーズ

---

悲惨・テニアン島

地獄を見た  
兵士

---

伊藤孝治

旺史社

## 著 者 略 歴

伊藤 孝治 (いとう こうじ)



愛知県知多郡三和村大字矢田字西根組35番戸  
村上芳太郎の長男に生る

昭和21年12月 サイパン俘虜収容所より復員

昭和22年1月 農業に従事

昭和24年5月 農業協同組合理事

昭和41年12月 社団法人愛知県中小企業福祉  
協会に勤務

昭和43年5月 中日新聞社の新大須音頭歌詞  
に応募佳作賞を受く

現住所 〒479 常滑市矢田字西根組62～1

電 話 05694-2-4419

伊藤 孝治

悲惨・テニアン島

1990年6月29日 発行

定価 2000 円

本体 1942 円

発 行 者 田 中 晴 雄

印 刷 所 株式会社 亨 有 堂

発行所

東京都新宿区原町 1-3  
電話 (03) 202-2812

旺 史 社

振替 東京0-399953 ISBN4-87119-209-1 製本 (有)小泉製本所

## 目次

### 一 暗い船出

|              |    |
|--------------|----|
| 精銳二十九師団出陣    | 5  |
| いよいよ南方へ      | 14 |
| 我が隊の任地はテニアン島 | 24 |

### 二 陣地と飛行場造り

|             |    |
|-------------|----|
| 貧しい島の人々     | 35 |
| 空腹をかかえて陣地造り | 43 |
| 飛行場造りに専念    | 58 |
| 島民の苦勞       | 75 |

### 三 砲爆撃の日々

敵機と初見参 85

戦闘配置につく 94

敵サイパン島へ上陸開始

98

無理な逆上陸と山砲射撃

108

サイパン玉砕の報に接す

113

米軍敵前上陸を敢行

122

### 四 暗い戦い

中隊を探し求めて 127

退避行と岡本隊との出会い

138

危機一髪・全滅より逃れる

153

部隊本部は全滅 179

見捨てられた民間人と兵隊

190

棲家の洞窟を求めて 211

## 五 暗い洞窟

奇遇・カチコウバ洞窟に入る 217

食糧危機に大量の米発見 230

哀れ十五歳の特年兵 247

毒ガス攻撃で民間人投降 257

米軍の建設能力は驚異だ 273

初の敵の夜襲と堀井の戦死 279

二回目の敵襲で山本兵曹を失う 290

三度目の敵襲では全員無事 299

米兵射殺で火炎攻撃を受ける 311

食糧逼迫・投降決意 324

すでに終戦後であった 331

あとがき 345



# 一 暗い船出

## 精銳二十九師団出陣

この日、私は週番上等兵であつた。

「全員、中廊下に集合っ」

各内務班を呼んで回つた私は、いつもと違って気合が入っていた。召集兵の私が馬鹿に力を入れて集合をかけたので、兵隊達はこちら数日前から部隊に動員があるという噂が本当だったのかと、真剣な顔つきで中廊下へ走つた。

週番下士が准尉に集合完了を報告すると、人事係の村田准尉は威儀を正し、

「今より、長期野宮の編成を発表する……」

編成は戦時組織の半分の人員で、一個小隊四十名の兵員であつたが、中隊には重機三挺を持つ機関銃小隊が配置されていた。

この長期野宮演習は防諜上の呼称で、戦況不振の南方戦線へ、国軍の最精銳といわれている関東軍を投入するのである。その先陣を受けたのが、私の所屬していた第二十九師団であり、兵員



のほとんどが現役兵という精鋭部隊であった。村田准尉は極めて平静に編成表を読み続けた。

まさかと思っていた私の名も、第三小隊第五分隊員として読み上げられた。というのは昨年八月、野戦勤務が三ヶ年以上の兵は召集解除になった。その時、私は三ヶ年に僅か十一日不足で残されたのだ。その年の三月の召集解除では、十五日も不足していた兵でさえ帰れたのに、八月には召集解除がなく同僚の同情をかった。その後、私の召集解除はついに来なかったのである。

発表が終ると、兵達は喚声をあげ内務班へなだれこむように戻った。

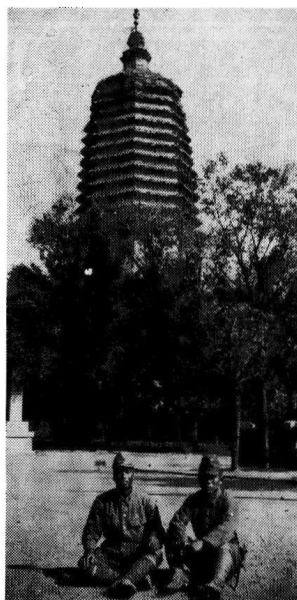
南満州の守備で脾肉の嘆を嘆じていた現役兵は、我が時来たれりと歓声を上げ、除隊間近の三年兵や召集兵はため息まじりで話す言葉も力ないが、中にはやけくそでわめている者もいた。残留者は部隊の一割ぐらいで、我々に笑顔も見せられず、こそばゆい顔をして見つめていた。

私はすぐに、週番上等兵を編成に入らなかった召集兵の舟口上等兵と交替した。彼は非常に気の毒そうに私を見て何か言いたげであったが、私はこの幸運な僚友の顔を見ることも話すこともできず、眼を彼の胸ボタンに固定したまま申し送りを終えた。

当時、召集兵、三年兵の内地帰還が迫っていた。そのため岐阜の原隊からは新兵補充の連絡がきていると噂されていた。が、動員下令であるから、もはや帰れるという望みはなくなった。

内務班へ帰ると早速遺書を書けと命じられた。私はどうせ書くなら立派な遺書を残そうと思ったが、筆は遅々として進まなかった。召集兵の中には妻子のいる者もいたが、私には帰りを待つ妻もいないだけに気は楽だ。

## 一 暗い船出



遼陽白塔公園にて鈴木一等兵（左）と著者

「小生が戦死したら靖国の宮に祀られて神となるから、こんな名誉なことはない。一門一家を集め酒宴でお祝い下され度く……」

父宛にこんな遺言状を書き上げた。戦後帰還すると、この遺言状だけは家族のもとへ送られていた。さらに戦死公報も入り村葬がすまされていたが、私が生還したのでかっこうのつかないことになった。遺書は結局私が自分で破って捨ててしまった。

興奮と悲哀の入りまじった一夜はたちまち明け、昭和十九年二月十九日の夜、完全軍装をして凍りつく宮庭に集合し、凍てつく道を踏みしめて部隊は遼陽駅に向った。遼陽には多くの内地人がいるが、防諜上、極秘裡の出動なので、見送ってくれる人の姿はなく心淋しい出陣であった。

この三年間、住み馴れたこの遼陽の街ともお別れである。宵闇に首山堡、軍神眠れる橋山、遼

陽城壁などが、いつになく黒々と覆いかかるように見えていた。

輸送列車は暗い遼陽駅に汽笛を残し出発した。狭苦しく暗い貨車に押し込まれ、私の三小隊と機関銃の一個分隊の兵達は、うずくまったまま横になることもならず、毛布一枚を膝にのせて突き刺すような寒気をし

のいだ。

途中、輸送列車は無人の駅でしばしば停車したが、見渡す限りの雪原であった。

翌朝、日が昇ると列車は朝鮮半島を南進していた。列車は車窓から単調な風景を見せながら、走り続けて夜になって釜山駅に到着した。まだ宵の内であるが釜山の街は暗かった。部隊は駅から徒歩で南の高台にある女学校に向った。女学校の講堂がここ数日の宿舎である。講堂に装備を下して大休止を終わって、待機している輸送船に軍需品を積み込むため港に向った。

波止場に着くと気の遠くなるような梱包の山積みがあった。ここだけは無数の電灯が煌々と輝き、クレーンの音が騒々しく活気がみなぎっている。真っ黒な海面に光が反射して波が無気味に光っている。夜ふけに作業止めの命令が下り、疲れた体をひきずるように女学校に引き揚げた。

翌早朝は珍しく起床ラッパで起されて、再び港に向った。この一日も兵器、弾薬、糧秣などの積み込みに追われ、船積みが終わったのは暗くなってからであった。

女学校に帰ると、薄暗い講堂の片隅に初年兵の平野が一人淋しく寝かされている。彼は他の班の兵隊だが、私が週番勤務の時、

「村上上等兵殿は飯の分配が一番公平です。皆喜んでいます」

とそつと言ったことがあるので覚えていた。週番上等兵は初年兵の使役を引率して、炊事から食事の入っている食缶を受領し、中隊の中廊下で各班に配分するのである。

この時、初年兵が周りでじっと見つめている。量が少ないと内務班に戻り俺の班は他の班より

飯が少ない、菜が少ないという古兵の文句が恐ろしいのだ。そうなれば腹ぺこの自分の量が減らされるため、神経を苛立たせているのがよく分る。

週番上等兵の中には、めんどくさがって第一班、第二班、第三班はこれと、実は大雑把に分けてしまう者が多いのだ。私は一人二人の差まで細かく計算して分けるので、初年兵は喜んでいたので、平野はそれを言ったのである。初年兵が週番上等兵の配分に口をはさめば、ことの良し悪しに関係なくぶん殴られるのが落ちである。

「平野どうした。大丈夫か」

私は思わず声をかけると、彼はつぶやくように明日入院しますと言った。熱が高く軍医に入院を命ぜられていたのだ。私は前の召集の時、マラリアで入院し内地送還になったことを思い出して、

「そうか。中隊の者とは別れるが、すぐ内地送還で岐阜行きだ。元気で頑張れよ」

と元氣づけると、平野は兄が隣りの道県で警察署長をしているから、入院したら知らせますといい、大変嬉しげで、村上等兵殿も氣をつけて行って下さい、と逆に私を励ましてくれたのである。

昨日と違って今朝は起床ラッパは鳴らず、「起床っ」の号令で起こされた。

「朝食後は身辺の整理っ」

と指揮班の方で甲高い声がしていたが、私は校庭に出てゆっくりと釜山の街を眺めた。街並み

はそろっていて、久しく見ない内地の街と少しも変りないように思えた。

放課後になると、女子学生が水兵服に縞の質素なモンペを着け、隊伍を組んで下校する。その中の一人が奉安殿の前までくると、

「歩調トレ、頭、右っ」

号令をかけ挙手の礼をする姿を見て、戦時態勢がここまでできているのかとつくづく思った。

夜七時、いよいよ上船するので講堂を出ようとすると、

「よう、ご苦労だな、村上上等兵」

と背後から声がかかったので振りかえると、隣の中隊の小平准尉である。この准尉は、前々から部隊演習などのおり、私が召集兵であるのをよく覚えていて、声をかけてくれるのである。編成以来、私が召集兵であるからと、中隊の上級者からは、一度もねぎらいの言葉を聞いたことがない。隣中隊の人事係准尉から、励ましともとれる言葉をかけられて感激して、

「准尉殿もご苦労さんです」

「お互いさま、気をつけような」

准尉は召集兵同士のようにくだけて言ってくれた。この言葉を耳にして、相手の心をつかむこととの上手な指揮官であると感じ入った。テナアン島に上陸してから、ぜひ再会をと思ったが、小平准尉とは一度も巡り会う機会がなかった。

埠頭に着くと、部隊の乗船する輸送船は東山丸であると教えられた。その船を見上げると黒々

とした船体は頑丈そのものであり、たのもしくも思われた。しかし、船首甲板に旧式の山砲が車輪をロープで固く縛りつけてあるのを見て、行く先の不安が身にしみる。並んだ二隻の輸送船の船首にも同じように、山砲が搭載されていた。

それは全く気休めともとれたが、潜水艦出沒の情報が入ると、いつも海上をにらんでいる黒光りした砲身が、我々を守ってくれているのだと感ぜられるのだから、妙なものであった。

乗船すると異様な臭気が鼻を突く。狭い階段を船艙へ降りると、この臭気は一層強くなった。電灯の明りが薄黄色く薄ぼんやりと照している。

十畳ぐらいの場所が小隊の居住区で、丁度農家の蚕棚のような三段の棚ができていた。低い天井にぶつからないように前の兵から、這って中へ入った。三年前満州に渡った輸送船も、十四年に南支へ行った輸送船も蚕棚であったが、一人当りの居住区がもっと広く、天井も倍の高さであった。乗船の時見た山砲といい、この蚕棚といい、海上の危険と船舶不足を暗示している。

それを立証するように出航に際して、沈没した時兵器を助けるため、軽機、投弾筒には甲板にある竹筒や木片を縛りつけよと指示された。甲板では薄暗い明りの中で、機関銃小隊が銃身や脚に太い丸太を縛りつけていた。兵も兵器も助かる方法として考案したらしいが、効果はどうであろう。この作業は航海の不安をかきたてる。

天皇陛下の兵器は身を以って護れ、と教育されている兵隊達は真剣に作業をしている。だが我我召集兵と三年兵はメンコの数が違えばかりに、ずばらを決めこんで何もしなかった。

「船が沈んだら銃は捨てろ。重いので浮いておれんぞ」

わざと大声で三年兵が話している。私もとくに捨てることに決めていた。

わずかに船体が振動し始めて船は港を出た。兵器だけは守れとの指示はあったが、我々の行く先はまだ明らかにされず、我々は南の島へ行くただけは信じていた。

朝、目覚めるといつか船の動揺はなくなっていた。

「船は今門司を過ぎ瀬戸内海へ入ったぞ」

と戦友がいうので甲板へ出て見ると、まさに三年振りに見る平穩な故国の姿である。いく隻かの帆かけ船が松の茂る島を背に浮いている。中国山脈が朝日に映え、白雪を宿した頂は輝いていた。見渡した限りでは故国の姿は、三年前と少しも変わってはいなかった。そのまま船は瀬戸の海を東進し続けた。行く先はやはり宇品である。

南方行きの中隊の召集兵は私を含めて八人で、召集兵の中では日頃温厚な者ばかりであった。

残留組の召集兵達は、

「お前達は宇品まで行けば召集解除になるそうだ。うまくやっているぞ」

と羨望とも慰めともつかない言葉を銭別にしてくれたが、私は宇品に向う船上で、その言葉を唯一の光明として勝手なことを考えていた。この分だと宇品に寄港するに間違いない、別れに臨んで励ましとして言ってくれたことが当たっている。絶対とはいえないにしても、彼等はいつも部隊の秘密は鋭く嗅ぎつけていた。今度の南方出動という秘密を、いち早く知っていたのも彼等で

## 一 暗い船出



雨の中を将兵を迎える国防婦人会

ある。

運がよければ、南方動員を転機として、除隊業務が行なわれ、中隊の召集兵全員が召集解除にならないまでも、私だけは前述のように十一日不足で除隊にならなかつたこともあり、除隊できるように思えてきた。

ついに船は宇品の港近くに投錨した。港には多くの船が碇泊して荷役の作業をしていた。その船越しに白亜の殿堂が見えてきた。帰還兵を歓迎する宇品の凱旋会館である。そこには国防婦人会の湯茶の接待も待っているだろう。

昭和十五年十二月に南支より帰った時は、私は嬉嬉として宇品の地を踏んだ。さらに昭和十六年三月宇品を出航して、三年振りに、私は再び宇品に帰ることができたという感慨より、人事係准尉の召集解除の命令を待ち心躍るのであった。

投錨すると、部隊副官と何名かの兵が舟艇に乗り



組み陸に向った。そして小山のように夏の軍衣を持ち帰った。

### いよいよ南方へ

それを船に積み込むと、船は解纜を始めた。私の期待は完全に裏切られ、三年振りに見た故国の土は一足も踏めず出航である。恐らく宇品も再び見られないであろうと私は思った。後日、小隊長の話によると、召集兵は宇品で原隊復帰になるはずであったが、兵員補充を望むべきもない島へ行くので、一人でも兵員を減らしてはならん、との師団参謀の発言によるものであった。

再び船は関門海峡に向った。

三隻の輸送船は九州の沿岸を南下する。夕暮れ再び甲板に立つと、海は時化模様で、浪高く、船は激しく揺れていた。左舷には南九州の島の切り立った断崖が霞んで見えていた。

内地の見納めだといって、甲板にたむろしていた兵達は一人、二人と船内に入って行った。私は暮色に消えゆく祖国の島を見ながら、心ゆくまで別れを惜しんだ。召集解除の未練を捨て去るためだったかも知れぬ。

船内に入るとひどく揺れるので船酔いを感じた。横になると服部三年兵が、

「村上さん、祖国ときぬぎぬの別れはすんだんか」

「村上、甲板で泣いたんだそうだぞ」